

# クラシック音楽へのお誘い

2022/11/26 水戸市立見和図書館

水戸芸術館 篠田大基

## ショスタコーヴィチ：交響曲第9番 変ホ長調 作品70

1945年作曲。第2次世界大戦におけるソヴィエトの勝利を記念した作品。ベートーヴェンの「第九」に匹敵する大作を求めた政府当局の期待に反し、比較的小さな楽器編成、合唱なしの小さな交響曲。全5楽章。

### 第1楽章冒頭

4小節目の ges (点線で囲った音) は変ホ長調の音階に含まれない音。それがトリルとアクセントで強調されている。この ges は、フレーズの始まりの c との間に三全音 (悪魔の音程) を形成する。



### ■ 作曲家ドミトリー・ショスタコーヴィチ (1906~1975年)

#### Dmitri Dmitriyevich Shostakovich

ソヴィエトを代表する作曲家。政府当局からの政治的圧力とのせめぎ合いの中で、15曲の交響曲、15曲の弦楽四重奏曲、オペラなど、多くの作品を残す。

### ●死後に出版された2つの著作 ⇒相反する作曲家像

#### 『ショスタコーヴィチの証言』(1979年)

ショスタコーヴィチが音楽学者 S. ヴォルコフに語ったとされる言葉をヴォルコフが編集した回想録。アメリカなど西側諸国で出版。偽書の可能性が高く、「証言」の信頼性は疑問視されている。

#### 『ショスタコーヴィチ自伝』(1980年)

公的に発表されたショスタコーヴィチの著作を編年体でまとめた著作集。『証言』に対抗するかたちで、ソヴィエトで出版。ソヴィエト政府が認めた「公式見解」。

### 例 交響曲第5番 二短調 作品47 (1937年作曲)

作曲の前年(1936年)に政府当局から作品を批判され、「人民の敵」のレッテルを貼られた。すでに完成していた交響曲第4番を封印し、肅清、死の危険を感じながら交響曲第5番を作曲。「批判への回答」として発表。ロシア革命20周年を記念して初演。

#### 『ショスタコーヴィチ自伝』日本語版、p. 86 (初出：『文学新聞』1938年1月12日号)

「わたしの新しい作品〔交響曲第5番〕は、抒情的英雄的交響曲といってもいいと思う。その基本的思想は、人間の波瀾の生涯とそれを乗り越える強いオプチミズム〔楽観主義〕である。わたしはこの交響曲で、大きな内的、精神的苦悩にみちたかすかすの悲劇的な試練をへて、世界観としてもオプチミズムを信ずるようになることを示したのである。」

#### 『ショスタコーヴィチの証言』中公文庫版、p. 373 \*下線は篠田。以下同様。

「第五交響曲で扱われている主題は誰にも明白である、とわたしは思う。あれは〔…略…〕強制された歓喜なのだ。それは、鞭打たれ、『さあ、喜べ、喜べ、それがおまえたちの仕事だ』と命令されるのと同じだ。そして、鞭打たれた者は立ちあがり、ふらつく足で行進をはじめ、『さあ、喜ぶぞ、喜ぶぞ、それがおれたちの仕事だ』という。

これがいったいどんな礼讃だというのか。」

## ■ 交響曲第9番 作曲の経緯

1944年		
10月11日	ソ連軍、ドイツ国境をこえて進攻。	11月7日 【引用A】
1945年		
1月12日	ソ連軍、ポーランドにて攻勢。	1月15日 交響曲第9番作曲に着手
2月4日	ヤルタ会談（英米ソ首相が対独戦後処理、	冬～春 作曲者の友人や生徒らが第1楽章のスケッチを聴く
～11日	ソ連の対日戦参加などを協議）	
4月15日	ソ連軍、ベルリン攻撃開始	
4月30日	ヒトラー自殺	
5月7日	ドイツ、無条件降伏	5月10日 【引用B・C】
		同時期 作曲者は「第9番」という数字、ベートーヴェンの交響曲第9番を強く意識
		6月末 第1楽章のスケッチを破棄
7月17日～	ポツダム会談（英米ソ首相が対独占領統治、	
8月12日	ソ連の対日参戦を協議）	
7月26日	ポツダム宣言（日本への降伏要求）発表	7月26日 交響曲第9番作曲再開
8月6日	広島に原子爆弾投下	8月5日 新しい第1楽章完成
8月8日	ソ連、対日宣戦布告	▶ 【引用D】
8月9日	長崎に原子爆弾投下	8月12日 第2楽章完成
8月14日	日本、ポツダム宣言受諾を決定	8月20日 第3楽章完成
8月15日	天皇の終戦詔書放送（玉音放送）	8月21日 第4楽章完成
		8月30日 第5楽章完成＝全曲完成
9月2日	日本、降伏文書に調印	9月10日 リヒテルとのピアノ連弾による試演
		11月3日 交響曲第9番初演

### 【引用A】『ソヴィエト芸術』1944年11月7日号

「わが国の創造の未来に思いをはせながら、いったいわたしは、きょう、何について夢想しているのか。たぶんソヴェトの芸術家ならだれでもそうにちがいないが、こんにちわれわれをとらえている大きな感情を表現できるような大作へのかぎりない夢が、わたしのなかに生きつづけている。近い将来のわが国のすべての創作のあいことは、短い調子の高い「勝利」であるとわたしは思う。」

（『ショスタコーヴィチ自伝』日本語版、p. 148-149）

### 【引用B】『ソヴィエト芸術』1945年5月10日号

「われわれは、過去をふりかえり、勝利への足どりをしっかりと見つめ、前途をたしかめ——何にむかって自分たちが進んでいるかを知っている。この過去と未来をきわめて明確に自覚することは、大きな形式の芸術作品——偉大な事業と現代とを不朽なものにする作品の形をとるべきである。われわれのあいだには、この名誉な責任ある仕事をむざむざと子孫にゆずる芸術家のいるはずはない。

古典になるべき作品を創らなければならない時、永遠の生命をもった作品、人類の真に貴重な財産となるべき作品を創造しなければならない時がやってきた。世界の芸術で最もすぐれた作品は、いつの時代にも人民のたたかい、勝利、その成果と固くむすびついていた。ベートーヴェンの第九交響曲は、1789年の事件〔フランス革命〕によって生まれたのではなかったらうか。」

（『ショスタコーヴィチ自伝』日本語版、p. 156-157）

### 【引用C】『ショスタコーヴィチの証言』中公文庫版、p. 291-293

「〔ヒトラーとの戦争に勝利したとき〕周囲のすべての人々はスターリンを賛美し、そしていま、わたしもこのいまわしい事業に加わるものと期待された。これにはいわば当然な理由があった。わが国が勝利のうちに戦争を終結し、どれほどの犠牲があったにせよ、肝腎なのは勝利したことであり、帝国が領土を拡大したことである。そこで、四管編成のオーケストラと合唱と独唱による指導者への讃歌を書くことがわたしに要求された。ましてや、第九番の交響曲の第九という数字はスターリンにふさわしいものに思われていた。〔…略…〕

スターリンを神格化する曲をわたしは書けなかった、まったくできなかったのだ。第九交響曲を書いていたとき、自分が何に向かって歩いているか〔批判を受けること〕を知っていた。」

#### 【引用 D】 批評家 D. ジトミルスキーの回想 （下線は篠田）

「帰る道すがら、ドミートリー・ドミートリエヴィチ〔ショスタコーヴィチ〕はまず私に“ウラニウム”爆弾について、広島信じ難く恐ろしい破滅について話した。〔…略…〕彼は短くせつかな語句で話した。しゃがれた、憔悴したような声の調子、うつろな眼差し、青ざめた顔色が彼の苦悩を伝えていた。〔…略…〕私は広島について、同時にこの瞬間の複雑さについて（私達にとっては戦争が終わっていたにもかかわらず）混乱のうちに考え、そして近い将来に何が控えているのかと考えた。私は自分の落胆を口に出そうとしたが、ドミートリー・ドミートリエヴィチは一点を見つめたまま、素早く私の嘆きを断ち切った。『我々の仕事は喜ぶことだ！』」

(E. Wilson, *Shostakovich: A Life Remembered* (Princeton University Press, 1994), p. 411.

工藤庸介『ショスタコーヴィチ全作品解説』（東洋書店、2006年）、p. 59）

## 交響曲第9番 変ホ長調 作品70

第1楽章 Allegro（速く）

第2楽章 Moderato（中庸の速さで）

第3楽章 Presto（急速に）

第4楽章 Largo（幅広く、ゆるやかに）

第5楽章 Allegretto（やや速く） - Allegro（速く）

### ■ 使用音源 \*Naxos Music Library で配信されている CD については URL も書いておきます。

ショスタコーヴィチ 交響曲第9番 変ホ長調 作品70

演奏：スチュワート・ロバートソン指揮、ウクライナ国立交響楽団、1993年録音  
Verdi Records AU-32 252 <https://ml.naxos.jp/work/8259027>

演奏：フェレンツ・フリッチャイ指揮、RIAS 交響楽団、1954年録音  
IMG Artists 7243 5 75109 2 9

ショスタコーヴィチ 交響曲第5番 二短調 作品47

演奏：レナード・バーンスタイン指揮、ニューヨーク・フィルハーモニック、1959年録音  
Sony Classical SMK 61841 <https://ml.naxos.jp/work/6683341>

ショスタコーヴィチ 交響曲断章（交響曲第9番第1楽章初稿）

演奏：マーク・フィッツジェラルド指揮、ポーランド国立放送カトヴィツェ交響楽団、2008年録音  
NAXOS 8.572138 <https://ml.naxos.jp/work/295490>

### ■ 参考文献

ヴォルコフ、ソロモン編『ショスタコーヴィチの証言』水野忠夫訳 中公文庫、1986年。単行本は市立中央図書館所蔵（762.38）。

グリゴリーエフ、レフ、プラデーク、ヤーコフ編『ショスタコーヴィチ自伝——時代と自身を語る』ラドガ出版所、1983年。市立中央図書館所蔵（762.38）。

工藤庸介『ショスタコーヴィチ全作品解説』（ユラシア選書）東洋書店、2006年。市立内原図書館所蔵（762.3）。

亀山郁夫『ショスタコーヴィチ——引き裂かれた栄光』岩波書店、2018年。市立見和図書館所蔵（762.3）。

ジョンソン、スティーブン『音楽は絶望に寄り添う——ショスタコーヴィチはなぜ人の心を救うのか』吉成真由美訳 河出書房新社、2022年。

井上道義、一柳富美子監修『日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト 2007』（演奏会プログラム）「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト 2007」実行委員会、2007年。

『ショスタコーヴィチ 交響曲 第9番』（Shostakovich Complete Edition）全音楽譜出版社、1991年。

日比野丈夫編『世界史年表』第4版 河出書房新社、1997年。